Mathematics Abacus Chinese character

料金後納
ゆうメール

育脳寺子屋NEWS

２０２６年　１１月号



０対９１の試合に学ぶ

～結果が悪ければ、する意味はない？～

かなり前の記事になりますが、高校野球の試合で０対91という大差の試合が取り上げられていました。

すごい試合やなぁ。ここまで点差がつくのはちょっと可哀想・・。

と感じながらも記事に目を通すと、そこにはまさしく教育がありました。

そして可哀想と感じた自分を恥じることとなりました。

選手はダメじゃないです

試合後、ツイッターでこう呟いたのは62被安打、17失策で91点を奪われて敗れた私立英心高校の豊田監督です。

「そりゃ、この結果は悔しいですよ。悔しくて、悔しくてたまらない。何人も泣きました。でも、光栄だなとも思いました。」

試合後のインタビューでこう語った監督、この大敗に光栄という表現を使うのには一体どういう意味があるのでしょうか・・

2008年に現在の校名になった英心高校は、元々不登校の子供を多く受け入れる学校で、その中には休み時間にキャッチボールをする生徒もいました。そこに野球経験のある豊田監督が、週１回程度のクラブ活動でみんなが楽しめるようにと、2015年５月に野球部を創設しました。

部員は男子５人、マネージャー１人から始まった野球部は少しずつ増え始め、10名に達したので日本高等学校野球連盟（高野連）への登録申請が通り、対外試合を組めるようになりました。

バット１本、ボール１０球、ヘルメットは相手から借りるというチーム状況で挑んだ最初の試合は０対２６で敗戦。この時の投手は「打たれたくない」と嘆き続けました。

「この日を機に彼に『エースの自覚』が芽生えた気がします。他の部員も高校野球の厳しさを知り、負けん気が出て野球にのめり込んでいきました。」

と監督は振り返ります。

それから約１年半後にあたるこの試合で、０対９１の大敗をします。

点差だけ見ると創部当初から何も変わっていないように感じますが、決してそうではありませんでした。

４回の英心の守備、ピッチャー返しの打球が投手のお腹を直撃し、立ち上がれなくなりました。

監督が「交代だな。」と告げると、投手は「最後まで投げさせて下さい！」と食い下がります。監督が折れて続投させると、相手チームの選手も立ち上がり、マウンドに再度立ったエースに向け拍手を送ったのです。

４回の守備を終えベンチに戻ったエースは「投げさせてくれてありがとうございました！」と監督に礼を述べました。実は彼は、中学時代まで不登校の生徒でした。

監督はこの試合を振り返り、こう述べます。

「今までは、ストライクが入らず四球が続く試合ばかりでした。すると、相手チームは20～30点も差がつくと、試合を終わらせようとバントして自らアウトになるんです。

でも今回の宇治山田商は県屈指の強豪ですが、フルメンバーで最後の最後まで攻撃の手を緩めませんでした。うちのピッチャーもストライクを入れられるようになりました。

これは**『終わらせてもらっていた試合』と違い、勝負の中ではっきりとついた91点差**だったと思っています。初めてチームとして認められたという感覚でした。」

こういった理由から『光栄』という表現を使われたのですね。

この記事を読んで、対戦相手だった宇治山田商の監督や選手たちにも拍手を送りたい気持ちになりました。

豊田監督は最後にこう話されたそうです。

「不登校だった子が、ただ学校に来るようになるだけではダメだと思っています。

私は野球を通じて心がしっかりと育ってほしい。自分の将来に前向きになり、人間性が形成されていって欲しいです。

うちの高校の生徒は体力的にもちょっとひ弱なので、野球で受験勉強のための持久力や忍耐力もつくと考えています。」

試合では全く歯が立たず敗れてしまった英心高校ですが、選手たちはこの点差以上に人間的な大きな成長を遂げることができたのではないでしょうか。

ちなみに、この大敗の翌日も誰一人練習を休まなかったとのことです。

クラブや勉強って　なぜするの？

クラブは何のためにするのか？当然、皆さん試合に勝つことを目標に日々練習しています。勝敗を気にしない勝負はしても意味がありません。

では負けたら意味がないのか？

それは先述の英心高校が教えてくれたように、０対91で負けた試合でも選手たちにとっては大きな意味があるのです。

チームや設備面の環境、個人の能力の問題など、どれだけ努力してもある程度「限界」があるのは否定できないと思います。オリンピック選手と同じ練習をしたからといって、みんな同じタイムを出せるわけではないですよね？

しかしそんな中で自分なりに上達する方法を必死に考えたり、挫折や成功を経験することで人間の幅を広げられるのです。

勉強も一緒だと思います。

例えば中学生が理科で習う「フレミングの法則」や国語で習う「五段活用」・「下一段活用」など、社会に出てからどれだけ必要性があるでしょうか？恐らくその分野の専門のお仕事でしか必要は無いですよね。

ではなぜ社会で必ず必要では無い事も学ぶのか？

それは「教科の勉強をする」ということを通して、社会に出てから困らないように、**「インプット→アウトプット」の練習**をしているのだと思います。

人は一人ひとり違うので、100人いたら100通りの学習方法が必要です。育脳寺子屋ではそれを生徒と一緒に考え、アドバイスし、励ましながら、自学自習をし続けてもらい、徐々に自分なりの学習法を見つけてもらっています。

今までは認知能力（知能や知識など数値化できるもの）、すなわちテストの点数や偏差値、成績、学歴が重要視された時代でした。

目まぐるしく変化を続ける現代では数値化できない非認知能力（意欲・協調性・粘り強さ・忍耐力・計画性など）が必要だと言われています。

上記の様な事は、最近専門家がよくロにするようになってきましたが、育脳寺子屋は数十年前から言い続けています。

育脳寺子屋ではこれからも目の前の勉強も大切にしつつ、将来社会に出てから100点を取り続けられる子を目指し10年、20年先を見越した指導をしていきます。

発行：株式会社育脳寺子屋ＭＡＣ　ＭＡＣ真成塾